

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20124

研究課題名（和文）「想像の故国」に戻って：ディアスポラ再移住とコロナ後世界の多文化共生の課題

研究課題名（英文）Returning to the "Imagined Homeland": Diaspora Remigration and the Challenges of Multicultural Coexistence in the Post-COVID World

研究代表者

李 眞恵 (Lee, Jinhye)

立命館大学・衣笠総合研究機構・助教

研究者番号：20896831

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、旧ソ連地域におけるコリアン・ディアスポラであるコリョ・サラムを対象に、故国に再移住したディアスポラのエスニック・アイデンティティの変容と流動化過程を解明し、国際的な多文化共生の可能性を検討した。それは具体的に次の3点についてである。第一に、コリョ・サラムの韓国への移住要因の基礎的な構造を通時的に解明した。第二に、彼らの移住の形態を解明し、それに従う移住の具体的な特性について明らかにした。第三に、韓国内のコリョ・サラムの移住の増加と集中居住地の形成による、ディアスポラのホスト社会における社会統合に焦点を当て、国際的な多文化共生の可能性を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歴史的故国に再移住したコリョ・サラムを事例とした本研究は、コリアン・ディアスポラの類型に対する総合的な理解に寄与し、他のディアスポラ再移住研究に比較時点を提供し、コロナ後世界の多文化社会に対する理解の底辺拡大に寄与したことで学術的な意味がある。また、故国に再移住し二重のディアスポラとなっている集団のエスニック・アイデンティティの変容についての最新の知見は、マジョリティによる統合の対象とみなされてきたディアスポラの議論に対して、さらにはディアスポラ研究へも新たな視座を提供するだけでなく、多様化かつ複合化する多文化共生研究において新たな理論形成に貢献することで学術的及び社会的意味をもつ。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on Koryo Saram, Korean diaspora in the former Soviet Union regions, and examines the transformation and fluidity of the ethnic identity of diasporas who have re-migrated to their homeland. The potential for international multicultural coexistence is also explored, and the following three points are specifically addressed. First, this study presents a chronological analysis of the fundamental structure of the factors that prompted Koryo Saram to migrate to South Korea. Second, the patterns of their migration are clarified and the specific characteristics associated with it highlighted. Lastly, this study covers the social integration of the Koryo Saram in the host society, considering the increased migration of Koryo Saram to South Korea and formation of residential areas with high concentrations of Koryo Saram, and presents the possibilities for international multicultural coexistence.

研究分野：地域研究

キーワード：ディアスポラ

1. 研究開始当初の背景

20 世紀末にグローバル化時代に入ると、国民国家の境界を超える人の移動が急激に増大した。そのようなトランスナショナリズムの拡散は、ディアスポラ概念の使用を広めることとなった。出自を同じくしながらも多様な国籍と言語圏に散らばったディアスポラの暮らしは、近代的な国民国家に同化されきれない存在として、次第に重要性を増してきた。母国からの移住、居住国での差別、母国への帰還といったキーワードで特徴づけられる近代的概念では、超国家的移住による多重アイデンティティを持つ現代的ディアスポラを説明するには限界がある。民族とは作られた「想像の共同体」であるというベネディクト・アンダーソンが提起した概念は今日では広く受容されているが、これらを区分していた血縁や言語などの境界の弱化はディアスポラに対する新たな観点を要求している。また、グローバル時代における移動によって形成された多様なディアスポラ集団の問題解明が急がれる。一方、国際的なコロナ禍によって、各国ではさまざまな多文化政策の限界が露呈し、民族・文化間の葛藤や差別といった国民統合をめぐる矛盾が噴出し、社会構成員間の葛藤はさらに深刻化している。ポストコロナ時代にも各国における人口構成の変化と社会・経済的不平等の深化による移住者の増加が予想される中で、統合と葛藤、少数民族共同体の拡大などによる変化に対して、学術的な捉え直しと新しい対策が要求されている。

2. 研究の目的

本研究は、ディアスポラ集団が歴史的に規定されてきた「想像の故国」を共有しながらホスト社会の中で居場所を求めて生きてきた現実を前提とし、さらに彼らの一部が「故国」に再移住することによって「二重のディアスポラ」となっている事例に着目した。本研究課題の問いは、ディアスポラ・マイノリティ集団の形成やアイデンティティ構築が再考を求められている現在において、歴史的故国に再移住または帰還移住したディアスポラがホスト社会ではどのような問題に逢着しているのか、また、その事例研究から、今日の多文化共生に資するどのような知見を得られるのか、である。特に、本研究では、旧ソ連地域のコリアン・ディアスポラであるコリョ・サラムの韓国への再移住に焦点を当て、彼らが歴史的故国であるホスト社会に流入する過程を解析し、ディアスポラの多様な存在様式の実態を考究した。さらに本研究はグローバル化以降の 21 世紀に特徴的な二重ディアスポラ論の事例研究を通じて、国際的な多文化共生研究に寄与することを目指すものである。

3. 研究の方法

本研究は、韓国に再移住したコリョ・サラムを事例として、ディアスポラの再移住とコロナ後世界の多文化共生の課題を検討するため、理論研究、一次資料の解釈、現地調査といった地域研究の手法で、具体的に次の 3 つについて明らかにする。第一に、移住のプッシュ要因とプル要因の通時的解明: ソ連解体後、旧ソ連諸国における基幹民族中心の国民統合政策の変遷とそれに伴う人口の域内流出などの少数民族の社会的動態の検討からプッシュ要因を検討する。また、グローバル化と脱冷戦という歴史的な脈絡と政権によって変化してきた韓国における在外同胞政策とコリョ・サラム受け入れ政策によるプル要因を検討する。現地の統計と資料といった一次資料の分析と移住現状の実態調査及び参与観察を軸に、コリョ・サラム移住の全体的な動態を明らかにする。第二に、2007 年以降、ウズベキスタン出身の永住目的移住増加の特性を解明: 移住を時期、目的及び形態、そして出身国別に細部に分類し、各集団の移住の具体的な要因を検討する。故国の言語と文化に対する異質感が存在するにもかかわらず、永住希望者が増加する要因について、移住増加と集中居住地形成の間に相関関係があるという研究仮説を設定し、政府・地域団体や社会・NGO などの支援現況等を検討することにより、上記集団の移住特性とアイデンティティの変容を明らかにする。第三に、ディアスポラによるホスト社会の地域再生の可能性検討: 高齢化と少子化により人口減少が進んだ地域に集中した彼らの移住による影響を検討する。特に光州、安山、始興などに集中された彼らの移住と集中居住地の形成を中心に集中居住地探訪、関連機関と人物へのインタビュー実施などの現地調査から、人口と労働力空白の解決、商圏の形成、雇用創出などの効果とその実態について明らかにする。

4. 研究成果

本研究課題の成果は、具体的に次の 3 点である。第一に、コリョ・サラムの韓国への移住現象の基礎的な構造を解明するために、旧ソ連地域の中でも移住人口が最も多いウズベキスタン出身コリョ・サラムを事例に、居住国におけるプッシュ要因と韓国におけるプル要因について通時的に明らかにした (Jinhye Lee, 2023. "Why do Diasporas Re-Emigrate to their Historical 'Homelands'? A Case Study of Koryo Saram's 'Return' from Post-Soviet Uzbekistan to South Korea," Journal of the Asia-Japan Research Institute of Ritsumeikan

University 5: 51-65.)。第二に、2007 年以降コリョ・サラムの韓国への移住が増加しているなかで、韓国政府がどのような法的地位を付与しているのかといった受け入れ政策の変化を検討することで、ホスト社会による統合の構造について分析した(Jinhye Lee, 2023. “Should Korean Diaspora Evacuees from Ukraine be Considered “Refugees” or “Ethnic Returnees” in South Korea?” *Ritsumeikan Journal of International Relations and Area Studies* 57: 23-42.)。第三に、韓国内のコリョ・サラムの移住増加と集中居住地の形成によるホスト社会における統合と多文化共生のための課題について考察した。これに関して2023年2月から3月まで韓国の安山、仁川、天安、公州、光州で現地調査を行い、帰還移住したコリョ・サラムの韓国への定着に焦点をあてて、韓国社会の統合の一側面を検討した。コリョ・サラムの韓国への移住の急増は、韓国社会への統合を意味するのか？ そうでなければ、統合を阻害する要素は何かという研究課題を設定し、帰還コリョ・サラムの法的地位と受容に対する政策的側面と、これに対するコリョ・サラムの実質的な対応の側面を検討した。

これらの研究成果は、帰還ディアスポラの移住、故国への統合、多文化共存に関する研究の土台を用意するものと期待される。また、コリョ・サラム・ディアスポラの韓国への帰還は、ホスト社会の統合、ひいては多民族共存を考慮する地域社会、国家、地域のますます多様で複雑な要求をどのように受け入れるかに関する、多文化共生研究の実証的な事例を提供するものと期待される。

しかし、本研究は帰還コリョ・サラムの当事者たちへの接触において不備が存在したことを認め、このような点を考慮して、今後はウクライナ出身のコリョ・サラムを含む帰還コリョ・サラムの法的地位上の問題をどのように解決するかについて、実質的な事例を中心に検討を進める予定である。また、今後帰還コリョ・サラムが韓国への定着を希望する場合、彼らが好む定着形態はどのようなものであり、韓国社会によってどう統合されるのか、それとも移住者が新しい移住を考慮するのかなど、より多くの側面を分析する必要があるだろう。また、韓国社会が経験している少子化と地方人口の格差を解消するために取ることができる措置が何かを検討する中で、その方案の一つが移民の受け入れならば、移民を受け入れ、統合するにあたっての韓国社会の制度的側面と実質的な側面の両方を総合的に検討していく。さらに、移民を含む多文化共存のために提示される政策と移民の現実、ひいては韓国が果たして社会統合に成功しているのかも検討していく必要があると思われる。これは韓国社会が移民をどのように統合しているかを理解する上で重要な手がかりを提供すると考えられ、また、それによって移民の受け入れと統合に多少消極的な東アジアでの多文化共存の在り様を計る物差しとなることができるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Jinhye Lee	4. 巻 5
2. 論文標題 “ Why do Diaspora Re-Emigrate to their Historical “ Homelands ” ? A Case Study of Koryo Saram ' s “ Return ” from Post-Soviet Uzbekistan to South Korea ”	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of the Asia-Japan Research Institute of Ritsumeikan University	6. 最初と最後の頁 51 ~ 65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34389/asiajapan.5.0_51	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Jinhye Lee	4. 巻 57
2. 論文標題 “ Should Korean Diaspora Evacuees from Ukraine be Considered “ Refugees ” or “ Ethnic Returnees ” in South Korea? ”	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Ritsumeikan Journal of International Relations and Area Studies	6. 最初と最後の頁 23-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/0002000470	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 3件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 李真恵
2. 発表標題 移住と定着を超えて、共生を考える：コリョ・サラム（高麗人）のディアスポラ・マイノリティの経験から
3. 学会等名 日本移民政策学会2022年度年次学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 李真恵
2. 発表標題 ディアスポラとしてのコリョ・サラム（高麗人）を考える
3. 学会等名 2022年度朝鮮族研究学会研究会 特別企画（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 李真恵
2. 発表標題 中央アジアにおけるマイノリティ・ディアスポラのアイデンティティの変容と多文化共生を考える
3. 学会等名 『20世紀北東・中央アジアにおける難民と戦争捕虜の表象（基盤B）』（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 李真恵
2. 発表標題 移動する人々：コリョ・サラム（高麗人）の経験から
3. 学会等名 2022年度ライスポールセミナー
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 李真恵
2. 発表標題 コリョ・サラム（高麗人）を考える：移住と定着の歴史と最新の研究成果
3. 学会等名 国際高麗学会日本支部人文社会研究部会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Jinhye Lee
2. 発表標題 Diasporic Return Migration and Multicultural Coexistence: A Case Study of Koryo Saram Migration from Central Asia to South Korea
3. 学会等名 Asia Pacific Conference 2022 Ritsumeikan Asia Pacific University (APU), Beppu, Japan. (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Jinhye Lee
2. 発表標題 Who Are “Diasporic Returnees” and How Do We Understand Them?: Conceptual and Empirical Proposal from Asia
3. 学会等名 AJI International Workshop, Asia-Japan Research Institute, Ritsumeikan University. (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 李眞恵
2. 発表標題 出張報告：クライナ難民コリョ・サラムの現状に関する研究（2023.2.20～3.3）
3. 学会等名 東ユーラシア研究プロジェクト（EES）神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート拠点2023年度第1回拠点会議、神戸大学
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Jinhye Lee
2. 発表標題 Diasporic Mobility and Belonging: A Chronicle of Koryo Saram’s Transborder, Forced Migration, and Return Experiences
3. 学会等名 NUQ-RU International Workshop・Facing the Challenges of International Coexistence in Asia Today: Welcoming the Migrants, Diasporas, and Refugees of the World, AJI (Osaka) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Jinhye Lee
2. 発表標題 The Current State of Acceptance of Refugees and Ethnic Returnees in East Asia: The Case of Korean Diaspora and the Evacuation from Ukraine to South Korea
3. 学会等名 From Exclusion to Inclusion: Migrants, Diaspora, and Returnees in Post-COVID Asia, Asia Pacific Conference 2023, APU (Beppu) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 李真恵
2. 発表標題 旧ソ連におけるコリアン・ディアスポラ（コリョ・サラム）の帰還移住の現状と多文化主義の課題
3. 学会等名 人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業東ユーラシア研究プロジェクト（EES）神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート（Promis）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 李真恵
2. 発表標題 AY2023 ANU-RU Visiting Researcher 's Program（派遣スキーム Dispatch Scheme）による派遣報告 Report of Research at ANU
3. 学会等名 立命館大学アジア・日本研究所研究員会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Jinhye Lee
2. 発表標題 Linguistic Challenges in Belonging: Russian-Speaking Korean Diaspora's Return and Education in South Korea
3. 学会等名 AJI Fifth International Colloquium on Asian Paths of Civilization and Development: Promoting Post-COVID International Collaboration（国際学会）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

その他、書いたものは次での通りである。（インタビュー）「第5回未来への対話：AJI若手研究者へのインタビュー」（立命館大学アジア・日本研究所HPに掲載）、（エッセイ）「カザフスタンと私」（アジア・日本研究Webマガジン『アジア・マップ』Vol.1（立命館大学アジア・日本研究所HPに掲載））、（年表）「カザフスタン21世紀年表」（アジア・日本研究Webマガジン『アジア・マップ』Vol.1（立命館大学アジア・日本研究所HPに掲載））、（コラム）「世界の中の「在日」：旧ソ連のコリアン、コリョ・サラム（高麗人）」『航路』11：104-110.

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------